美の本質（承前）

西田幾多郎

四

多くの美學者は心理學者の墾に倣ふて、感情を單に無內容なる快不快と考へるから、自ら美の內容を他の知的作用に求めねばならぬ。是に於て知覺とか表象とか想像とかの內容が直に美的內容として考へられねばならぬ樣になる。或は感官的知覺が美的感情の基礎と考へられ、或は美の感情は表象感情であるとか又は想像感情であるとか考へられるのである。併し眞に美的內容を含むと考へられる直觀は作用と作用との直接の內面的結合でなければならぬ。色とか音とかいふものが、考へられた色や音ではなくして、その一々が生きた働きとして、一つの作用から直に他の作用に移り行くのが直觀である。是故に直觀は意識成立の根源と考へられ、その內容は我々に對して與へられたものと考へられるのである。知覺や表象が美的感情の基礎として考へられるのは、此の如き直觀の意義に於てでなければならぬ。知覺

や表象の中に含まれ居る知的內容が美の對象となるのではない、作用と作用との結合の內容が美の內容となるのである。空間的知覺に就いて見ても藝術美の內容となるものは、その知的對象たる客觀的空間ではなくして、知覺其物の統一力として內に働きつゝある主觀的空間である。ヒルデブラントの一つの因子がすべての他の因子との關係に於て意味を有つといふ perceptual form とは、此の如きものでなければならぬ。Witasek は美的感情は表象の內容の感情であつて作用の感情ではないと云つて居るが、氏の作用といふのは心理的に考へられた作用を意味して居るので、氏も美的性質の Aussergegenständlichkeit を說く美とシムメトリやメロディとは同一でないと云つて居る。(Witasek, Aesthetik, P. 195; P.17.)

想像 Phantasie が直觀的として詩的內容の所在と考へられるのも、同樣の理由によると考へられねばならぬ。知覺に於ては、感覺內容の一々が作用として內面的に結合するのであるが、想像に於ては表象內容又は概念內容ともいふべきものが一々作用として直に結合するのである。想像が普通に das anschauliche Vorstellen と考へられるのは之に由るのである。思惟と想像との區別は此處にあるのである。此兩者を統覺的結合と考へるも、その綜合の直接なる所に、想像の直觀性があるのである。是

故にその內容は如何に抽象的であつても、作用としてその結合が內面的にして直接なる時一種の美感を有つこともできる。ディリシェレが音樂を聞いた機會に數理を解し得たといふ如く、數理の如きものにも音樂美を見ることができるであらう。想像の直觀性をその內容の感覺性に求むるのは、皮相の見たるを免れない。想像の直觀性はフィヒテ、シェルリングなどの考へた如く、その內面的創造性にあるのである。フォルケルトは ein Sichloslösen von den Boden der gewöhnlichen Wirklichkeit と云つて狹義の想像の特徵として居るが、想像の直觀性は元來此處にあるのみならず、知覺の直觀性や生氣も之に基くと考へねばならぬ。

右に述べた如き美的內容の直觀は受働的ではなくして能働的である、卽ち單に知的作用ではなくして、自ら意志の作用を含んで居らねばならぬ。作用と作用とを內面的に結合するものは意志の立場でなければならぬ。藝術的直觀の內容は作用其物が直に內容となるのである。Witasek などが美的性質の理想性、非對象性を說き、シムメトリやメロディは直に美と同一ではないと考へるのも、之に由るのである。藝術的直觀の對象たる理想は直觀が之を寫すのではなくして、直觀が之を創造するのである、作用其物が客觀的となるのである。今日多くの美學者が美的鑑賞の必要條件

となす感情移入といふとも此如き考から理解せねばならぬと思ふ。感情移入といへば、物と我と相對立し、自己の感情を物に移入して見るといふ樣に考へられるのであるが、私は他我の作用と自我の作用との直接の內面的結合であると思ふ、我々が生れ出つることによつて見出す如き大なる自我の發生であると思ふ Karl Groos などは內面的模倣によつて物が擬人化せられ、感情が物に移入せられると云ふが私は內面的模倣といふ如きことは却つて作用と作用との直接の結合の結果、新なる生命發生の結果であつて、その原因ではないと思ふ。今日の自己が昨日の自己を省みて自己同一を意識する時、我々の心は心と直に結合するのである、記憶は記憶自身を維持して我々の後に迫りつゝあるのである。生理學的には記憶を維持するものは腦皮質の細胞に過ぎぬと考へられるであらう。併し此如きは說明の爲に設けられた假說に過ぎない。アミールの云ふ如く我々は絕えず les phalanges dées idos invisibles によつて圍まれて居るのである。所謂感情移入によつて自他の精神が直に結合せられる場合に於ても、同樣である。唯時間的形式が空間的形式と變つたに過ぎない。心理學者は此の如き精神作用の根柢として本能といふ如きものを考へる。併し本能といふのは意志を自然界の背後に射影したものに過ぎない。我々の精神的內容を創造

し行くものは精神的內容である。模倣の內面的感覺といふ如きものは自他合一の意識內容の象徵に過ぎない。模倣の感覺が單に感覺としてではなく、客觀的意識內容を寓するものとして、始めてかゝる働きを成すのである。Hirnが子供の時、我々が理解する前に模倣し、模倣するとによつて理解すると云ふが、我々の意識の奧底には始より合同的意識が潛在して居るのである。感覺的內容が作用として直に結合するのが純粹知覺であり、表象的內容が作用として直に結合するのが想像であるとすれば、感情移入は意志と意志との直接の結合と考へることもできるであらう。併し此等の作用は元來相異なれるものではなく、同一作用の異なれる方面に着目せられたものと云つてよい。超認識的立場に於て作用と作用との直接の結合といふことが、此等の作用の本質であつて、之によつて孰も美的內容の所在と考へられるのである。感覺內容が一々作用として直に相結合するといふことは、他面から見れば感情移入といふことでなければならぬ。我々が物の形を知覺するにも感情移入によらねばならぬ、R, Vischerの說の如く此際Entlanggleitenといふ如き筋覺が働かねばならぬ。心理學者は觸覺のローカル、サインの系列が運動の感覺によつて結合せられて、空間知覺が成立すると考へるのであるが、具體的知覺としては唯ベルグソンの云ふ

如く動き la mobilité と云ふ如きものがあるのみである。そこには運動感覺によつて結合せられたローカル、サイン以上の或物がある、全體が一つの連續である。創造的空間卽ち空間のアプリオリといふものが、一方に於て觸覺の性質的變化をしてローカル、サインたらしめ、一方に於て筋覺、關節覺等の性質を方向、延長などと解釋せしめるのである。カントが直覺のアプリオリと考へた空間は感覺內容を一々作用として結合する內面的創造力である。我々の具體的知覺は之によつて創造せられるのである。內面的模倣によつて空間知覺が構成せられるのではなく、我々が斯く感ずる時、空間的知覺が自己自身を完成するのである、單なる認識對象の世界から意志對象に移り來るのである、受働的狀態抽象的狀態から能働的狀態具體的狀態に移り來るのである。かゝる場合に於ける感情移入は空間的知覺の自覺に過ぎない。自覺に於て知るものと知られるものと一なる如く、具體的知覺に於て內容は直に作用となる。唯此全體は唯 Formgefühl の內容として藝術的に表現し得るの外はないのである。內面的模倣によつて他人の表出運動に感情を移入するといふのは我々の心底に於て合同的精神の覺醒を意味する如く、空間的知覺が自覺し來るのである。感情移入といふも元來感情を物に移入するのではない。すべてが作用として相結合

する時、そこに新なる意識內容を生じ來るのである、感情といふ新なる內容の意識が顯現し來るのである。而して作用の作用の立場、卽ち人格的立場の上の內容として、自ら人格的色合を帶び來るのである。

美的感情の基たる直觀はその知覺たると想像たるとを論ぜず、單なる知的作用ではなくして、作用と作用との直接の結合たる純粹感情、純粹意識でなければならぬ。知的作用としての知覺又は想像は感情の一面に過ぎない。客觀的內容に主觀的感情が移入せられるものではない、作用の作用の立場に於て新なる對象界を生ずるのである、此の如き藝術的直觀は自ら藝術的創造作用を伴ふて來なければならぬ。否、藝術的創造作用といふのはかゝる作用の完成の狀態である。ディルタイは、Die Einbildungskraft des Dichters, に於て、詩人の創造作用を我々の精神生活の本質に求て居る。氏に從へば我々の實際の精神生活に於ては、感覺も表象もすべて感情に充ちた活動である、知覺も心像も皆生きて變じ行く出來事である、すべてが一つの構成作用 Bildungsprocess である。此如き精神生活の構成作用は一方には外的意志の形を取一方には內的意志の形を取るのであるが、其間に感情の構成作用の廣い領域がある。此の如き構成作用の中に於て感情が實在を包むと考へらる如き平衡の場合もある

が感情其物の中に緊張を含み、而も此緊張は内外の意志によつて止めることのできない場合がある。此場合に於て氏は erschütternde unaufhebbare Tatsache teilen ihre dunkle Farbe allen Dingen mit und in schwermütigen Grübeln entstehen Bilder, die ihnen gemäss sind と云つて居る。狂や酒の醉ひの幻覺や錯覺からミローのウェーナスやラファエルのマドンナに至るまで、皆此の作用の結果として現れ來つたのである。詩人の創造作用は夢や狂の意識とその性質を同じくして居る。ゲーテは眼を閉じて花を想起した時、その花は忽ち分解して花の中に花を生じ、Rosetten der Bildhauer の如きものとなると云つて居る。私はディルタイの此の如き考に深い興味を見出さざるを得ない。私が我々の意識はその具體的狀態に於て卽ち絕對意志の立場に於て、作用と作用との內面的結合であると云ふのは、ディルタイの實際の精神生活に於てはすべてが感情に充ちた活動であると云ふ意義に外ならない。かゝる Tathandlung の受働的方面が直覺と考へられ、その能働的方面が感情移入と考へられるのである。併しディルタイの云ふ如く此作用は意志によつて止めることのできない表現を求める。これが卽ち藝術的創造作用の本質である。此處にはベルグソンの所謂「動き」の如き知覺や意志の形に於て表はすことのできない內容が、その表現を求めるのである。併し私は此の如

き考の尙一層明晰に言ひ表はされたものとして、フィードレルの　Über den Ursprung der künstlerischen Tätigkeit"　を取りたい。氏に從へば、物はその單なる存在によつて我々の知識の對象となるのではなく、我々は我物に構成することのできる結果のみを受け得るといふ考を徹底的にすれば、實在は我々が構成した結果の表現たる心像より成ると云ふの外はない。我々の精神作用はいづれも心內の事件として己むものではなくして、必ず肉體に於て表出を求める。表出運動は精神現象の外面的符牒ではなくして、その發展完成の狀態である。精神作用と表出運動とは內面的に一つの作用である。斯くして我々の言語といふのは思想の符牒ではなくして、思想の表出運動である。言語によつて思想は己自身を完成するのである。我々の所謂實在界とは言語によつて表現せられた世界に過ぎない。併し、我々の世界は單に思想や言語によつて表現せらるる世界のみではない。我々の精神作用はいづれも無限なる活動であつて、各自表現の世界を有つて居る。純なる視覺作用は思惟が言語に發展する如くに、自ら我々の身體を動かして一種の表出運動に發展する。これが藝術家の創造作用 künstlerische Tätigkeit である。我々が此立場に立つ時、忽ち概念の世界は失はれて、そこに無限なる視覺の世界の展望が開かれるのである。私は之によつてディ

ルタイが內外の意志によつて止めることのできない藝術的表現の最も深い意味が明にせられると思ふ。ディルタイの說明は藝術的創造作用の主觀的意義に止まるが、フィードレルに於てその客觀的意義が明にせられ得るのである。

併し私は右の如き意味に於て藝術的創作の眞相を明にするには、深く精神と身體との關係から出立して見なければならぬと思ふ。我々が絕對意志の立場に立つ時、心の內といふものもなければ外といふものもない、心身一如の活動あるのみである。此立場に於て現れ來る作用と作用との內面的統一の內容、卽ち純粹意識の內容は、思惟の範疇を超越したもので、之を認識對象界に持ち來すことはない、唯我々は之と共に動くことによつてのみ理解し得るのである。自覺に於ての如く働くことは知ることである。ベルグソンは「創造的進化」に於て眼の生成について次の如き解釋を試みて居る。眼について驚くべきことは構造の複雜と作用の簡單との對照である。眼の構造の驚くべく複雜なるに拘らず、視覺作用は單なる一つの事實である。如何にして、視覺作用が眼を構成し來つたか。手の運動には無數なる位置とその順序との以上に或物がある如く、視覺には眼を構成する細胞とその相互關係以上の或物がある。自然が眼を構成するのは、我々が手を擧る如く、單なる一つの働きである。我々が機

械を作るのは個々の物片を集めて之を一つの目的に從つて組立てるのである、云はば周圍より中心に行き多より一に行くのであるが、有機的構成作用は之に反し物質の一點より始まつて、己自身を擴大し行くのである。而も兩者の區別は單にかゝる外面的差違のみではない。製造物は製造の途筋の一々を現はして居る。或一つの機械を作る場合に、製作者は先づ各部分を作り、之を集めて全體を作る。全體は仕事の全體に當り、部分は仕事の部分に當る。科學者は我々の眼も此の如くにして生成せるものと考へる。併し有機的機關の全體は假りに有機的仕事の全體に當るとするも、その各部分は仕事の途筋を示すものではない。何となれば、此機關の部分は des moyens employés を示すものでなくして un ensemble d'obstacles tournés を示すものである、凸型ではなく凹型である。純なる視覺は無限を見透さんとする一つの力である。併し此の如き視覺は fantôme に過ぎない。生物の現實的視覺は物によつて限定せられる、卽ち une vision canalisée である。而して我々の感官たる眼とは單にこの travail de canalisation を示すに過ぎない。前に云ふた手を動かす例に於て、手を鐵粉の中に差入れたとすれば、我々の眼とはその跡形の如きものである。私はベルグソンの視覺作用の創造といふ如きものが藝術的創造作用の本質であると思ふ。藝術的創造の本

源はエラン・ヴィタールにあるのである。フィディヤスの鑿の尖から、ダ・ヴィンチの筆の端から流れ出づるものは過去の過去から彼の肉體の中に流れ來つた生命の流れである。彼等の中に溢るる生命の流れは最早や彼等の身體を中心とする環境の中に留ることが出來ないで、新なる世界を創造するのである。ベルグソンは我々の幼時の人格は極めて豐富なるも、成長するに從がつて之を捨てて行かねばならぬと云ふが、現實に觸れて捨て去らねばならぬ天才の豐富なる生命が藝術的創作に於てその出路を見出すのであるそれは fantôme かも知れない併しそこには le grand souffle de la vie がある。此の如き場合に於て作品と藝術家とを結合するものは內面的筋覺である、之れを通じて一つの生命が流れて居るのである。是故に藝術的作品は筋覺の發展と見ることが出來る、卽ちフィードレルの云ふ如く藝術的創作は表出運動であるといふことができるのである。フィードレルは我々の眼は感覺や知覺を與へるのみならず、身體の外部機關を動かして、單に內面的であつたものを外面的表出運動に發展させると云つて居るが、此點に於て藝術的作品はその根柢に於て製造品と異なつて居る。或る一つの目的に從つて構成するのではない、多より一に行くのではない、一より多に行くのである。フィドレルの云ふ如く、一つの視覺作用が自ら筋覺を伴ふて全身の

運動を起すのである。否、始まりそれは心理學者の云ふ如き單なる視覺作用ではない、作用の作用の立場に於ける人格的作用である、筋覺を內在的に含んで居るのである、生命の一つの流れである。此立場に於て藝術家と作品とは「動き」la mobilité といふ如き不可分離なる一つの作用となるのである。此立場に於て萬物が活かされるのである。これが感情移入の眞意義である。藝術の對象界は表出運動を通じて見られた世界である、否之によつて成立する對象界である、プロチヌスの云ふ如く沈默によつて理解すべき世界である。以上の考を更に次の如く言ひ表はし得るであらう。純粹視覺の世界といふのは視覺作用が作用の作用の立場に立てそれ自身を發展する具體的體驗の世界であつて、之に對して超個人的主觀の對象界卽ち絕對意志の否定的方面を物質界と考へるならば、純粹視覺の發展といふのは、ベルグソンの云ふ如く鐵粉の堆積の中へ手を差込む如く、視覺作用が物質界を切り拔いて進むと考へてよい。而して我々の身體といふのは全生命の流れ行く物質界に於ける痕跡であり、眼といふのは視覺作用の進み行く物質界に於ける痕跡で、あつて視覺作用は眼の細胞の中に含まれて居るのではない、眼の細胞やその配置は視覺進行の痕跡であり、視覺の流の堤防であると考へることができる。斯く考へるならば、我々の普通の

視覺の世界といふのは我々の普通の眼に對應する視覺の世界であり、視覺が或程度まで物質界を切り開いたのである、云はば手を用ゐないで眼自身の力によつて彫刻せられた彫像、描がかれた繪畫である。併しフィードレルの云ふ如く我々の普通の視覺界といふのは視覺界として不完全なものである、他の對象界によつて妨げられて居る、眼の刻める彫像、眼の描ける繪畫は不完全である。エラン・ヴィタールの一つの流なる視覺作用は作用の作用として無限なる發展を要求する。是に於て眼の成す能はざる所のものを手が之を助けるのである。。フィドレルも die Hand nimmt die Weiterentwickelung dessen, was das Auge tut, gerade an dem Punkt auf und führt sie fort wo das Auge selbst am Ende seines Tuns angelangt ist と云つて居る。此時我々の手は眼の一部分となるのである、卽ち全身眼となるのである。斯くして完成せられた視覺の世界が藝術の對象界である。彫刻や畫は、手を含める眼によつて見られた實在である。彫刻家が刻みつゝある時、畫家が描きつゝある時、彼等は唯見つゝあるのである。プロチヌスは自然は見つゝ作るのではなく、自然の見るといふことは作るといふことであるといふが、此點に於て藝術家は自然其物である。視覺作用其物が一つの大なるエラン・ヴィタールの流であるとすれば、藝術は普通の眼と云ふ如き堀割の中に盛りきれない大な

る生命の流の溢出である。他の人格的作用の並行的發展を俟たずして、視覺作用が獨り己を專にする la variation brusque である。故に物に感情が移入せられるのではない、內容卽力なる作用の作用の立場に於ては、元來すべてが生命である、すべてが純なる感情の內容である。感情移入の基と考へられる運動の感覺と云はれるものは、却つて物質に對する此生命の反動に過ぎない。我々が綱渡りの動作に感情を移入するといふのも、手を加へた眼を以て之を見るといふことである、眼に盛りきれない視覺作用の發展を意味するのである。感情移入とは主觀的自我の價値感情を客觀化するのではない、主客對立以前の具體的生命の發展である。視覺的生命には視覺的生命に特有なる自我の香があり、聽覺的生命には聽覺的生命に特有なる自我の色合がある。此故に pictorial charm と musical charm とは互に他に翻譯することのできない、それぞれの美を有すると考へられるのである。

藝術の內容は直觀的であるといふが、藝術的直觀は單なる直觀ではない、表出運動を通じて見たる直觀的內容である。藝術的創作は亦單なる創作ではない、見ることが卽ち作ることである、內容それ自身の發展である。ゲーテの經驗に於ての如く一つの花の心像の中から自ら無數の新なる花を生ずるのである。藝術家の直觀は卽

ち形成作用 Gestaltungstätigkeit である。此の如き直觀卽創造たる藝術的立場は、物と心とを獨立の實在と考へ、知と意とを獨立の作用と考へる立場からは、到底之を理解することはできぬ。併し具體的實在はベルグソンの云ふ如きエラン・ヴィタールの流である。絕對的意志の立場に於て作用と作用との直接の結合ができるのである。ディルタイが Gefühlslage の中に含まれたる、內外の意志によつて止めることのできない緊張といふのは、此生命の流の壓迫でなければならぬ。これは我々の心內の事實ではなくして物心未分以前の事實である。此處には概念的分析の刃を入るべき餘地はない。此要求は自然界の事實ではなくして、自然界の實在性は却つて之に基づくのである。

五

ゲーテが Die Sterne die begehrt man nicht; man freut sich ihrer Pracht と云つた如く、カント以來は美は無關心 interesselos と考へられ、美の對象は假相 Schein と考へられる。近時コンラット・ランゲの如きは美感の本質を bewusste Selbsttäuschung に求め樣とした。實在といふ語を自然科學的實在といふ意義に限るならば、美の對象は云ふまでもなく之

を實在界に求めることはできぬ。併し所謂實在界とは絶對的自我の反省の方面であつて、具體的實在の抽象的一面に過ぎないとするならば我々は所謂實在と異なつた意義に於て美的對象に實在性を附與することができる。カール・グロースは美的對象の實在性は感覺的實在性より來るが、美的錯覺に實在性を與へるものは motoris che Vorgänge im Organismus であると云つて居る(K. Groos, Der aesthetische Genuss, S. 227)。シラーの „Taucher" に於て „da kroch heran, regte hundert Gelenke zugleich" といふのは千言萬語の叙述に勝る感があると云ふ。併しグロースはこの有機體に於ける運動といふものに單に自然的實在以上の意義を認めて居ない、心理的實在以上の意義を認めて居ない。此の如き運動感覺によつて與へられた實在性は、認識對象の客觀的世界に對しては、依然として一種の錯覺たるを免れない。併し前にも云つた如く藝術的對象界を惹起する內面的摸倣は單なる運動感覺ではない生命の流の反動である。ベルグソンの云ふ如き「動き」la mobilité の意義がなかつたならば、我々は嚴密なる意味に於て運動の感覺といふものを有つことはできぬ、唯 Localzeichen + Muskelempfindungen あるのみであらう。怒つた人の彫像は實際怒つた人の表出や態度を盡く寫して居ないが、彫像の感覺性と直接に結合することによつて、その實在性を取ると考へ

られるが、私は之に反し人間の怒といふのはベルグソンの la vision の如くそれ自身に於て圓どかなる生命の流の一表現であつて、實際に怒つた人の表現も、彫像の表現も共に此生命の外殼に過ぎない。否、名匠の彫刻の方が却つて此眞實を一層能く表現するといふことができる。實際の怒つた人に於て見られる多くの表現は、其實際の本質の表現として無用なる場合が多い。藝術家は實在を摸倣するのではない、我々の肉體の中に盛り切れない生命の世界を創造するのである。ベルグソンの云ふ如き un acte simple, indivisible としての視覺作用其物を明にするものは、解剖學者でなくして却つて畫家でなければならぬ。名匠の描ける眸の中に含める生命こそ我々に無限の色の世界、形の世界を創造し來つたものである。von Gogh の見た力の世界、Gauguin や Matisse の見た色の世界とは此の如き實在でなければならぬ。此世界は唯表出運動を通じて見られ得るのである。　現代の Expressionismus の畫家は此立場に達し得たものと考へることができる。私は所謂實在界の實在性といふのもかゝる實在の實在性から附與せられたものと思ふ。感覺の實在感は之に基くのである。グロースは Kopie-Original-Illusion と aufkeimende Illusion との區別について次の如き例をあげて居る。二人の人が夕方室に入つて巧妙に作られた自殺者を見、一人は直に

その僞を認め、一人は驚くとする。兩人共に同一の印象を受けて居るのであるが、その一人は單に之を摸寫として知的に見、他の一人は全く人工的な點に氣付かないのである。併しその僞を認めた人も暫く見て居る中に漸く錯覺が强くなり、前の正しき判斷を失ふことなくしてあはき一種の恐怖を感する。これが aufkeimende Illusion である。此の如き場合に於て、最初は恐怖した人も、冷靜に之を摸寫として見て居た人も、共に知的立場の上に立つて居るのである。唯十分にその僞を知つて居る人が aufkeimende Illusion に入る時、卽ちコンラット・ランゲの所謂 bewusste Selbsttäuschung に入る時、もはや知的眞僞の立場を離れて超知識的立場に入るのである。眞とか僞とかいふのは是に於て無意義となる。錯覺などいふのは知的立場から見てのことである、幻覺や錯覺には異なれる實在性を含んで居る。我々が先驗的理想主義の立場に立つ時、此世界は一つの bewusste Selbsttäuschung である。意識して自分を欺く時、それは既に欺きではない。

美の感情はハルトマン以來 Scheingefühle と考へられる。我々が劇を見て喜び或は悲むも、我々自身が實際に喜び又は悲むのではない。Witasek などは感情移入の際、我々は實際の感情を有するのではなく、唯感情の表象を有するのであると考へて居

る。かゝる場合、自我と考へられて居るのは、時間空間因果の世界に射影せられた心理的自我でなければならぬ、對象化された自我でなければならぬ。併しかういふ自我は眞の自我ではない、反省せられた自我であつて反省する自我ではない。此の如き自我は何等の內容を有せない。かゝる自我こそ自我の表象であつて實際の自我ではない。我々の具體的精神現象はかゝる自我と意識內容との結合ではない。意識は內容其物の內面的發展であつて、かゝる內容的發展の統一が自我であり、其の統一の內容が感情の內容である。我々の眞の自我はいつでも客觀的內容を含んだものである。リップスは美的鑑賞の自我を ideelles と云つて居るが、ideelles ならざる自我はない自我は ideelles なるが故に reales である。美的感情こそ眞に實感情 reales Gefühl である。精神現象は意味卽實在にして活働 Aktualität の範疇によつて成立するのである。美的感情を假感情を Scheingefühl と考へるのは自我を對象化して見るが故である。此時旣に眞の感情は消失して居るのである。所謂實感情とは有機感覺の如きものにあらざれば、旣に欲求の形を成せるものに過ぎない。ハルトマンは Der mit dem Reflex der aesthetischen Scheingefühle bereicherte und erfüllte aesthetische Schein ist also der Sitz oder Träger des Schönen; er ist es, der von dem ihn aesthetisch Auffassenden als schön genos

sen wird. Dieses aesthetische Geniessen ist offenbar ein reales Lustgefühl. と云ひ此實感情と假感情とは恰も海に浴するものが passives Wohlbehagen に於て海に己をまかす如く融合すると云つて居るが、元來實感情と假感情とがあるのではない。氏の所謂實感情の立場によつて感情が物に移入せられ、物が活かされて、所謂假感情が成立するのである。而して此の如き主客合一の立場が眞の自己の立場である、美的實感の外に具體的感情なるものがあるのではない。氏は Der aesthetische Geniessende sieht das schon verlorene Ich in der Seligkeit der aesthetischen Scheins wieder auftauchen, wie ein Träumender sich in Traum agiren sieht, ohne sich zu zweiteilen und ohne das träumende Ich von den geträumten Ich zu unterscheiden といつて居るが das geträumte Ich といふものはない。デカートが夢みる自我も自我であると云つた如く、眞の自我の立場は認識對象界以上の立場である、眞僞を超越した作用の作用の立場である。此の立場に於て藝術の對象界が成立するのである。主觀的世界を客觀的に見る錯覺の中に認識對象界以上の實在性を有すると云つたのも之によるのである。知的判斷の對象界に於ては、虛幻と考へられ、無と考へられるものも、價値判斷の對象界即ち文化の世界に於ては實在となる。而して判斷は價値意識の假定の上に於て成立し得るのである。價値意識の上に立つ世界は最

も具體的なる實在の世界である。

美的感情は、以上述べた樣な意味に於て眞の自我の感情であり、その對象界が却つて眞の具體的實在であるとするならば、美の世界と所謂實世界とは如何なる關係に於て立つか。我々の個人的人格の世界は絕對自由の自我の立場に於て成立する具體的實在の部分であるが我々の自我は絕對的自我の全體ではない。ベルグソンの語を以て言へば、我々の生命はエラン・ヴィタールの全體ではない。我々の個人的自我の流に對して無限なる作用が逆流すると考へることができる。ヘルバルトの考をかれば、一つの表象が意識の上に現れるには、他の無數の表象の妨碍 Hemmungen と戰はねばならぬと考へることができる。是に於て主客の對立、內外の區別が生じて來る。ベルグソンは無意識に二種の區別をなし、一つは無意識 conscience nulle で一つは無くなつた意識 conscience annulée であると云つて居る。前者は眞の無であつて、後者は正と負と相反せる兩數の相殺である。石の落つる如きは、全く無意識的であつて、石はその落つることを知らない。之に反し、習慣によつて機械的となつた我々の動作とか、睡遊者の夢中步行とかいふのは表象が動作の實行によつて塞がれて居るのである。是故に若しその動作の實行が妨げられた時は、直に意識が現れて來る。

意識は始からあつたのである、唯妨けられて居たに過ぎない。我々の意識といふのは表象に對する動作の不足 une inadequation de l'acte à la representation を示すものである、即ち實際の動作を取り卷く可能的動作の光明の如きものである。可能的動作の多い所は意識も深い。意識とは實際の動作と可能的動作との量的差異と云つてよい (L' Evolution Créatrice, P. 156-157)。右の如き考に於て我々が動作の場面に出るといふのは、我々が深く自己の根抵に横たはる絶對意志に結合することである。動作の場面とは絶對意志の否定の方面である。此世界との結合は、我々は絶對意志の中に立つものとして我々の存在の條件となる。此場面に於ては、我々の作用は動作に答ふるに動作を以てする、作用は其内容を失ふて單に一つの動作となる。此世界は作用に對しては、單なる客觀的對象界として立つ、物質界とは此の如き世界に過ぎない。自覺の體驗について云へば、現在自己を反省する作用と向に自己を反省した作用とは、過現未を超越して而も之を統一する自我の立場に於て相結合すると考へることができる。而していづれの反省作用も自己の全體でないから、此場面に於て作用と作用とはその内容を否定して單なる行爲として相結合すると考へねばならぬ。物理學者の acceleration の概念はかくして成立するのである。すべて實在はかゝる場面を

背景として立たねばならぬ。有限なるものは無限なるものの上に成立つ、我々の自我の底にもかゝる無限の流がある。此場面は我々の自我の存在の基たると共に打ち克つべく與へられた課題である。此場合を破つて進むこと卽ち之を內面化することが我々の生命の要求であり、具體的實在の發展である。我々の實生活とは本能生活から文化生活に至るまで、かゝる生命發展の無限の過程に過ぎない。藝術的意識內容といふのは、之に反し之の如き客觀界を內面化する具體的實在の內容である。絕對意志の對象界たる動作の場面といふのはそれ自身に於て獨立する實在ではない、恰も、空間に於ける point at infinity の如きものである。具體的實在に於ては、自覺に於ての如く知と行とは直に一でなければならぬ、意識と無意識とが一つのものでなければならぬ。此の如き具體的實在の純なる內容が藝術的意識內容であり、此內容が所謂實在界卽ち動作の場合と接觸する所に意志の內容が現れ來るのである。意志の內容卽ち實生活の內容は存在の條件によつて限定せられた藝術的意識內容である。單なる無意識と異なつた「無くなつた意識」とは動作によつて塞がれたものではなく、動作を內面化したものでなければならぬ。練達によつて得た受用底といふのは單に機械的習慣ではない。畫家が畫を描く場合、無論概念的判斷に從ふのでは

ないが、單に自動的運動ではない。そこには力の自覺がなければならぬ、反省的自覺ではなくして、行爲的自覺がなければならぬ、所謂スタイルとは行爲的自覺である。ベルグソンの云ふ如き動作に對する表象の過剩に基く意識の外に、動作によつて塞がれることによつて卽ち主客合一によつて生する意識があるのである。有理數の場面に於ての零は無理數の場面に於て零とはならぬ。而してすべて抽象的なるものは、具體的なるものの基礎となり、目的となる如く、前者は後者の上に成立するのである。

（完）